【研究ノート】

関係資料からみる大東文化学院の歩み
―大東文化学院物語(九段時代)―

谷本　宗生

はじめに

筆者(谷本宗生)は、2023年の大東文化大学創立百周年に向けての『大東文化大学百年史』編纂の作業を担っている。これまで、総務課や学務課といった学内の主要事務部署での文書資料の所在確認作業を実施している。学園理事会や大学評議会等の議事録をはじめとした校史(学園の歩み)にかかわる編纂上で基本的な関係資料にあたって簡易の所在目録をとりながら、百年史編纂に向けての必要な情報を編纂の中心となるべき大東文化歴史資料館(大東アーカイブス)に集約するようにつとめている[1]。

筆者の持論である考えとしては、本学に限らずそもそも大学・学園史の編纂は史実に基づいた「学術書」としての位置付けを目指すことは重要であるが、自らの足跡を綴る学園物語という「読み物」である創意工夫も怠ってはならないと考える。それは、現代の少子高齢化・生涯学習社会へ向けての大学・学園としての社会的な「説明責任」に他ならないからである。今までに刊行されている主な本学の大学史としては、『大東文化大学五十年史』(1973年、全1121頁)や『大東大学七十年史』(1993年、全831頁)、『大東文化大学の歩んできた道』(2013年、全113頁)があるが、「学術書」と「読み物」との折り合い、その関係性は非常にむずかしい課題である。たとえば『大東文化大学五十年史』では、全体構成からみて創立期から大東文化大学設置までの記述(大東文化学院時代)に470頁、実に4割以上の紙面を割いているが、典拠資料などの出典明記がなく大学史として確認するには不明な点が数多い。加えて、当時の学生生活や教育風景などを読者が把握しにくい問題があるとい

えよう。しかし近年、尾花清編『大東文化学院創立過程基本史料』(大東文化大学人文科学研究所研究報告、2005年)や浅沼薫奈「大東文化学院創設者たちの教育思想　平沼騏一郎・小川平吉・木下成太郎の相互関係から」『人文科学』17(大東文化大学人文科学研究所、2012年)らの研究調査もあり、大東文化学院の創立過程などは資料発掘の成果に基づいて明らかにされつつある。そこで本稿では、とくに戦前の大東文化学院(九段時代)における学業・生活を具体的に明らかにするため、従来必ずしも十分にフォローされていなかった関係資料を可能な限り視野を広げて追求してみたい。これらの資料群の活用によって、本学の大学史編纂の新たな地平を開拓できるのではないかと考える。

1　学院創立期の受験・進学案内書(～1931年)にみる大東文化学院

本学の前身にあたる旧制下の大東文化学院(専門学校)について、当時は社会的にどのようにみられ、実際に評価されていたのであろうか。管見の限りながら、学院創立期(～1931年)に当時の青年子弟らが活用したとされる主な受験・進学案内書から、本学の記述を少しひろってみたい。なお以下、本稿で引用する資料内の[　]部分は、引用者(谷本)が付すものである。

泰山堂編集部編『独学受験就職全書』(1925年、国立国会図書館蔵)。

「大東文化学院　概要[略][本年度の]開校は大正十四年四月十一日所在地は東京麹町区富士見町六ノ一六である。入学資格　本科入学資格(一)中学校又は師範学校卒業者(二)小学校正教員資格者(三)中等教員検定受験資格者(四)毎月三月中学師範学校卒業の見込あるもの　高等科入学資格(一)高等師範学校卒業者(二)専門学校漢文科卒業者(三)中等教員漢文科有資格者　別科入学資格(一)漢文科の成績優秀なるもの　入学手続　毎年十二月頃の官報に発報せられたる期間内に入学願書、履歴書、性行考査書予選課題作文等を差出せばよい、之等に依つて予備合格通知を受けたもののみが入学試験を受ける、此通知を受け

ない者は入学試験を受くることが出来ない右記載の予選作文問題は入学者募集官報と共に公表される、例へば大正十四年の問題は本科の方は『我国青年の任務』高等科の方は『東洋の前途』と云ふのであつた。特典　先づ月謝を徴収しない、次に成績が優秀で貧窮なる学生に対しては学費を補給される、其補給を受けたい学生は最初予選合格通知を受けると共に給費願書に戸籍謄本、父兄又は本人の財産額若しくは納税額につき市町村長の証明したるものを添付して差出すのであつて、許可された場合は入学許可と共に給与額が通知される、そして又第二学年以後の給与額は其学年始めに其学生一身上の事情や、学業の成績等に基いて夫々決定される[2]。」

野村太刀雄『全国官公費貸給費学校入学受験案内(附)最近各学校入学試験問題集』(1931年、国立国会図書館蔵)。

「大東文化学院　所在地―東京市麹町区富士見町六丁目十六番地一、沿革　本学院は大正十年第四十四議会以来三回に亙り衆議院一致の建議と貴族院一致の賛成とを以て国庫から補助金の下附となり財団法人大東文化協会経営の下に設立されたる専門学校である。大正十二年八月[ママ]に至つて文部大臣の設立認可がありついで本科卒業生は漢文科中等教員無試験検定の資格を与へられる等後記の特典を得るやうになつた。従つて歴史は未だ若く昭和二年以降の卒業者は昭和六年一月に於て本科二百六名、高等科六十名である。現在の総長は大津淳一郎氏である。二、校則摘録　[略]科名―本学院には、本科、高等科及補習科を置き別に研究科を設けている。修業年限は本科、高等科は各三年、補習科一年、研究科は一年又は二年とす。従来、本学院は給費制であつたが、昭和六年度よりそれを廃し、奨学金制を置き、又入学者より入学金授業料を徴収するやうになつた。従つてこれからは給費学校の中に数へることが出来ないかも知れないが、授業料の安価なる点に於て、又学校の性質に於てさう呼ぶことにした。奨学金―学力

優等品行方正なる学生には奨学金を給与することを得、但し中途退学又は除籍せられたる者は事情により本人又は保証人より給与したる金額の全部又は一部を徴収することもあるべし。入学金及授業料―入学検定料及入学金は各金五円とす。但し本学院本科卒業後直に高等科に入学する者は之を免除す。授業料は研究科を除く外、各科共一ケ年金三十円とし之を三期に分納する。特典　他の高等専門学校の如く兵役徴収を左の如く延期される。本科二十五歳迄、高等科二十七歳迄　卒業後はイ、正科生及甲種別科生にして本科卒業生は漢文科中等教員、高等科卒業者は同高等教員無試験検定の資格がある。ロ、昭和三年三月以後の本科卒業者(別科生を除く)は高等文官試験の予備試験を免除せられる。三、入学試験　募集人員は本科第一学年五十名、高等科五十名である。志願者資格　正科生　一、中学校卒業者　二、師範学校卒業者　三、専門学校入学検定規定に依り試験検定に合格したる者四、専門学校入学者検定規定に依り専門学校入学に関し指定せられたる者　別科生　一、甲種―小学校本科正教員尋常小学校本科正教員小学校専科正教員若くは小学校准教員の免許状を有する者　二、乙種―正科生又は甲種別科生たるの資格なきも本学院に於て相当の学力ありと認めたる者　高等科入学資格　正科生　一、正科生として本学院本科を卒業したる者　二、高等師範学校又は専門学校に於て本科生として漢文科若くは国語漢文科を卒業したる者　三、本学院本科生の入学資格を有し且漢文科又は国語漢文科の中等教員免許状を有する者　別科生　一、甲種　イ、甲種別科生として本学院本科を卒業したる者但し小学校本科正教員の免許状を有する資格を以て本科に入学したる者に限る　ロ、漢文科又は国語漢文科中等教員免許状を有する者　二、乙種　正科生又は甲種別科生たるの資格なきも本学院に於て相当の学力ありと認めたる者　入学手続　入学志願者は二月末日迄に左の書類を提出すること。イ、入学願書　ロ、履歴書　ハ、戸籍謄本　二、写真　ホ、戸主の資産額　ヘ、検定料五円　試験科目　試験科目は学科

試験と身体検査とに別ち、学科試験は左の如くである。本科、国文解釈(文法を含む)、漢文訓点及解釈、作文(文語体—仮名交り文)、高等科、国文解釈(文法を含む)、漢文訓点及解釈、作文(漢作文)　試験場所　本学院であるが樺太、朝鮮、満州、台湾より志望する者は其地方官衙又は学校に委託する。四、卒業生の進路　昭和二年三月始めて第一期生として本科五十名、高等科十五名の卒業生を出し、爾来本年四月迄、其の数二百六十余名を社会に送つている。而してこれ等卒業生の無試験検定は孰れも好成績を示している。即ち入学しても成績その他の事情で所謂成業不能なるものは一、二年に於て一、二名、三年の卒業生を通じて五、六名位なもので、他は全部所期の目的—本科は中等教員高等科は高等教員の資格を得ている。元来無試験検定は学校当局の成績上申を基礎として文部省が行ふのであるが、他校は八十点位で合格と聞いている。然し本校は七十五、六点の様に想像される。これは文部省が本校の教授及成績を信頼している為であらうと思はれる。本学院は卒業期になると卒業者氏名を刷つて全国各中等学校に就職依頼を兼ねて配布するが、これによつては卒業生の三割位の就職率を見ている。他は個人関係を頼つて就職している。本年も本科の十名の内、五、六名は就職を見ている。主として中学校であるが、女学校や又は新聞社の校正、調査、又は著述の手博をやつているものもある。俸給なども教員よりよい。本年の分は未だ不明であるが、去年の教員の俸給は九十円位が普通で、最高百二十円であつた。高等科卒業は余り若年の人は別として主として師範学校の国漢の主任などに招聘されるが、孰れも百二十円以上で、入学前の経歴のある人などは年俸千八百円位の人もある。又新聞記者や著述家になつている人もあるが、創立未だ日浅き為、所謂社会的名士の輩出は見ないが、やかては輩出することを信じている。(当局談)」[3]

いまだ関係資料調査の過程ながら、大正末期(1925年)刊行の『独学受験就職全書』と昭和初期(1931年)刊行の『全国官公費貸給費学校入学

受験案内』をみても、興味深い本学園史の論点がうかがえる。本学は主として漢文科中等教員養成(本科)を、漢文科高等教員養成(高等科)を目指す専門学校として存在し、1931年まで給費制でそれ以降は奨学金制(入学金及び授業料徴収)へと移行している点は重要な画期といえる。『全国官公費貸給費学校入学受験案内』(1931年)所収の「卒業生の進路」でも触れられてあるが、漢文科の教員以外の卒業後の職業選択肢も徐々に学院生らのなかで志向し始めていたことはたしかであろう。『大東文化大学の歩んできた道』でも、「それまで経済面における事情から進学を諦めざるを得なかった漢学を志す優秀な学生を含め老若問わず受け入れていた学院も、学問的門戸をさらに広げて学生募集を行い、近代的高等教育機関としての形式や内実を整えて行かざるを得なくなった」[4]と指摘している。『大東文化大学五十年史』では、「志願時における学生そのものの考え方にも変化を生じてきた。創立当時は政府補助による経営で授業料は徴収せず、かつまた給費制度があり、まことに恵まれた制度の下に漢文を専攻しようとする真の漢文愛好者の集まりであったが、昭和六[1931]年度に至って政府補助も大幅に減額され(八万円)、授業料徴収のやむなきに至った(六年度入学生は三十円、七年度は六十円)。従って、入学志願者も必ずしも漢文愛好者のみでなく、国語・漢文の両科目を履修し、男女中等学校就職に有利な条件を具えるよう希望したことも事実である。[略]従って、漢学専攻を主とする学者型とは異なった実践型の別の流れが生まれてき、この傾向は特に年少気鋭の本科生に強く、かつまた大陸の風雲ようやく急を告げるに及んで、満蒙の地に進出を目指す気運がたかまってきた。このような素地はすでに創立当時より教授や協会内の先覚者達によって培われていたもの」[5]と指摘している。今後、この点についてはさらに資料収集を重ねて論証を深めたい。

2　大東文化学院で学んだ、または教えた本学関係者ら(西脇玉峰・中山博道・小松武治・内堀維文・鈴木篤三郎)について

2－(1)

本学園史を包括的に捉えるうえで、戦前の大東文化学院に学んだ学生生徒や本学院で教えた教職員らの証言や足跡などについて、できる限り網羅的に調査し、そのなかで主要な学院関係者らの言動や活動について十分把握しておく必要がある。いまだ調査の過程ながら目下筆者が注目している、主な本学関係者らについて指摘してみたい。まず、高等科の一期生であった西脇玉峰の証言「私の当時の思ひ出」(大東文化学院報国団雑誌班編『東文』第1号、1941年、奈良県立図書情報館蔵)を挙げる。

「恐ろしい大震災のあつた大正十二年の十月二十日の朝であつた。私は学校へ出勤する前、万朝の二面を見ているとふと目についたものがある。それは大東文化学院の第一期学生募集広告であつた。『本院は上下両院一致の援助と巨額なる国庫の補助と、斯道の碩学全部の協力により設立せられ、帝国の天職と世界の趨勢とに鑑み、本邦固有の皇道と国体に醇化せる儒学を主とし、参するに欧米の知識を以てし、有守有為の人材を養成するを以て目的とす、大東文化協会会頭大木遠吉、大東文化学院総長平沼騏一郎』とあつて、[『]募集学生は本科一年及び高等科一年で、更に月謝を要せず、且つ成績及び事情に依りて相当の給費を為す』と附記してある。当時五十三歳であつた老学究の私の胸は何となく踊つた。早速学則と入学手続書を求めて見ると、本科は三学年、高等科は二学年である。二年位なれば何とか辛棒が出来ようと心密に期し、履歴書に予選の作文課題『吾人当面の急務―文語体六百字以上八百字以下』を添へて提出した。締切が十一月三十日であつたが、私はその結果を一日千秋の思ひで待つた。十二月十日、学院から予選合格の通知を受取つた。選抜試験は二十五、六日の両日で、『その前日午後三時迄登院の上受験心得御聞取相成度候』と附記してあつた。[略]

果して合格の通知である。しかも月六十円也の学費を給与するとしてある。始業式は[大正十三年]一月十一[日]だつた。[略]第二学年の終りに改革騒ぎが起り、大正十五年三月、内田、松平、佐藤の三教授が免職され、続いて十数名の教授の連判辞職となつて[略]新任教授続々補充され、立派に授業がされるやうになつた。[略][私が第]三学年には支那語と英語が正科になつた。ロージヤの哲学史や、教育学を原書でやることになつたので、私は大に面喰つた。三十年ぶりで英語をやり直すので、非常に苦労であつた。やがて卒業式が来て三年三ヶ月を経過したのは昭和二年の三月であつた[6]。」

西脇玉峰の証言のなかでも、高等科第3学年に進級した折り(1926年度)、「西洋思想史」(助教授・文学士　見尾勝馬)「教育学及教授法」(助教授・文学士　見尾勝馬)「英語」(講師・マスターオブアーツ　木村巌)などが新設されたことが、学院創立期からの教育課程の変遷上ではとても興味深い。1925年9月には、本学院高等科の修業年限が3カ年に延長され、1926年7月に外国語に関する一部改正の件(学則改正)が認可される。同年8月、本学院高等科卒業生に対し、高等教員漢文科無試験検定の資格が指定認可(文部省告示第334号)される。1927年度における「各教員受持学科学年表」によれば、見尾教授;(英語)本科1年、(教育)本科3年、高等科2年、(西洋哲学史)高等科3年、木村講師;(英語)本科2年、本科3年、高等科1年、高等科2年などと記されている[7]。なお帝国大学哲学科卒(文学士)である見尾勝馬(1894～1946年)が、「哲学研究に志す初学者のため[略]哲学思想を研究せしむるに最も興味心と愛知心とを起さしめるやう工夫した」文献に『哲学新綱』(1926年、国立国会図書館蔵)がある。そのなかで、見尾は「哲学に関しては勿論色々の定義はあるけれども大抵この五つのものの中にはいらないものはない。その広さより見れば一般科学となり、深さより考ふれば根本科学となり、内容より見れば精神科学となり研究方法よりすれば理論科学となり、目的よりすれば規範科学となる。[略]一言にして哲学の

定義を下せば宇宙人生に関して人類の知的需要を満たすための理論を構成する学問なりと云ふことが出来る[8]。」と述べている。

また西脇玉峰の証言とおり、本学院第1回卒業式は1927年3月8日に挙行されている。当日の卒業式については、『同学』第4号で次のとおり記されている。

「此日天気晴好午後一時第一鈴にて職員学生入場、同十五分来賓入場、大島[健一]総長は勅語を奉読し次で高等科卒業生十四名、本科卒業生五十名に対し証書を授与し総長は学院創立の由来より説き起して卒業生の任務の重且大なる所以を訓示にし諄諄告諭する所あり。次で文部大臣代理山内督学官告辞あり。次に前協会副会頭江木枢密顧問官は祝詞を述べ本院の起源創設の経過より説き此に第一回卒業生を出せるを祝し、社会思想の趨勢を述べて卒業生の覚悟を縷説せらる。次で在学生総代岡村利平氏の祝辞朗読あり。以上に対して卒業生高等科総代近藤杢氏本科総代待野一男氏の答辞あり。かくて二時三十五分式を終る。[略]主なる来賓は文部大臣代理山内雄次郎氏、枢密顧問官江木千之氏、元田肇氏等にして其他各学校長、学生父兄、保証人等四十余名なり。式後職員及卒業生は学院玄関前にて記念撮影を行ひ、次で別室に於て卒業生の職員謝恩会あり。席上卒業生永原鉦作、西脇玉峰両氏の謝辞あり。大島総長及市村、岡田、松本諸教授卓上演説あり。前川教授の祝詞あり、師弟一同打寛ぎ家族的団欒の歎を尽くし六時解散せり[9]。」

高等科卒業生(第1期)のほとんどは教員となっている。1927年6月、高等科卒業生13名に高等教員漢文科免許状が、本科卒業生36名に中等教員漢文科免許状が下附される。本科卒業後直に高等科に入学した者については、受験料が免除されている。なお1927年度に高等科1年に在学した学生内訳は、給費生19名、自費生10名である。1928年度の高等科2年生の内訳は、給費生18名、自費生2名となり、1929年度の高等科3年生の内訳は、給費生17名、自費生2名となっている。そして1930年3月に高等科を卒業した者(第4期)は計16名である[10]。

2－(2)

本学は“スポーツの大東”ともよく称されるが、その歴史的な起源や系譜などについては、残念ながら今までほとんど顧みられていない[11]。それでは、戦前期における大東文化学院同学会運動部(剣道)の1927年7月の東京歯科医学専門学校との練習試合の模様を、以下に示したい。

「[昭和二年]七月一日(金)午後二時より東京歯医専の選手を迎へ本学院道場に於て剣道練習試合を行へり。思ふに、我学院は建設以来他校との試合は許可せざる主義なりしが、今日歯科医専より申込ありて遂に許可せられたり。四月以来脾肉の歎に堪へざりし剣道部猛者連の勇気は頓に加はり申込受諾より試合迄僅に一週間殆んど、練習の暇も無く当日となりぬ。試合の結果は僅少の差[16対19点]を以て敗れたれども、静粛に且元気に勝敗に熱中する事なく、能く剣道の本領を守り礼節を失ふこと無く、本学院剣道の精神を十分に発揮し得たるは、真に大成功と謂ふべし。而も此の挙によりて従来の独善的境地を脱して更に一段の進歩と飛躍とへの第一歩を踏み出したるを思へば此の一挙によりて我が剣道の得たる所の多大なりしを知るべし。此の日大島総長事務取扱中山[博道]師範始め諸先生の臨席を得、且同窓諸君の熱心なる応援ありしは、本部の光栄とする所なり。特に中山師範には自ら審判の任に当られたり。先づ藤井幹事[戦士大将]の開会の辞あり。次いで中山師範の審判に関する注意ありて個人三本勝負に入りぬ。一進一退虚々実々各渾身の力を以て相戦へば、竹刀は電光と飛び、満場粛として声なし。試合終りて、暫時地稽古を行ひたる後、別室に於て茶話会を催せり。中山先生始め矢木[参三郎助手]桑田[福太郎助手]井場[正人同学会主事]先生等も参加せられ、互に打解けて歓談せり[12]。」

大東文化学院同学会の運動部は、そもそも「[校友]会員心身ノ鍛錬ヲ以テ目的トス」るもので、当初は「修業科目ハ当分剣道ノミトシ時宜ニヨリ他ノ諸種ノ武道並ニ運動競技等ヲ実施スルコト」として始められる(1924年度)。そして、「剣道以外ノ事ニ関シテハ実施ノ都度ノ細目ヲ

規定ス」るとして、剣道に加えて弓道、柔道が加えられていくことになる。

大東文化学院剣道部の初代師範を務めた中山博道(1872～1958年)は、幼いころから見習奉公しながら単身上京し、碁道の研究を当初行う目的で師範の囲碁相手をつとめながら18歳の折り、神田西小川町の剣道道場の門人となる。以後、剣の免許を允許され33歳で本郷真砂町に自身の道場を開いた人物である。"昭和の剣聖"ともひろく称され、大日本武徳会から剣道、居合術、杖術の三範士号を授与されている。中山は大東文化学院をはじめ、慶應義塾、中央、法政、明治、二松学舎、東京帝国大学などで剣道師範を歴任し、多くの青年子弟らに剣道を教えている。以下の「試合に臨む態度」「勝負のあとで」の教えから、当時の青年子弟らに中山が剣道をとおしていかに教えていたのかがうかがえる。

「絶えず気合の充実を心がけ、間合いの運びと敏、且つ正しく自分を知って相手を極め、迷いをさけ、先手を取るを旨とし、虚実を察知変に当たって動ぜず、果断即決、正しき攻撃にも豪も悔を残さず、しかも礼を尽くして平静を保つを勝負者の本懐とす[13]。」

「私等、日常の稽古や勝負にかけている者にとっての訓えとして、勝っても奢ることなく、敗れてもくよくよするな、とされているが、しかし敗れた時に毅然たる態度には容易になり切れないのは人間の通有性であって、勝負の席でこの不平不満や他方尊大振りが勝敗を境にして露骨に表れ、厭な気分にみたされがちなことは普通とされている。これは考えなければならぬことである。特に目立つ醜さは、自分の敗戦を審判の拙劣にありとするがごとき言動で、これは洵に恥しい限りと言わねばならぬ。負けた口惜しさを自己修業の不足に変換する位になっていただきたい。[略]勝って爽やかな気分であるよう堂々としたものでありたい。ここでまた、打って修業するよりも、打たれて修業する方が倍も心に価値を与えてくれるものだと言われた言葉を、勝敗に併せて考えねばならない。人にもよるが、修業に年代が経てば、ある程

度勝負に拘泥しないような位域に達し得る。勿論それは心の問題故その人にも因ることには違いないが、幸いこのような心構えになってくると、初めて修業の効果が表れてくるものだ。[略]勝負自体に拘泥することは当然ななりゆきではあるが、その延長をいつ迄も心に留めるのはよくない。結果の悪かった時には、己れに限って反省をより強くしたいものである[14]。」

2－(3)

1929年5月、大津淳一郎学院総長の指揮のもと大東文化学院同学会を発展改称して、大東文化学院志道会が組織される。志道会は学院総長を会長とし、在学生を主たる会員として構成し、「本学院建学ノ精神ヲ発揮シ、会員相互ノ親睦向上ヲ図ル」ことを目的とする。同年の志道会役員構成は、会長：大津淳一郎(学院総長)、副会長：小柳司氣太、庶務部部長：市川林太郎、研究部部長：諸橋轍次、雑誌部部長：小松武治、弁論部部長：芳野幹一、剣道部部長：柏崎延二郎、弓道部部長：金子元臣、旅行部部長：峯間信吉、柔道部部長：那智佐典である。このなかで、雑誌部長(教授)を務める小松武治(1876～1964年)は、東北学院普通部、第二高等学校、東京帝国大学英文科を卒業した文学士である。1929年度本学院の「学科課程及担任一覧」をみると、小松武治;「教育学」(本科3年)、「西洋思想史(欧文)」(高等科1年)、「教育学及教授法(欧文)」(高等科2年)と記されている[15]。小松は東京帝国大学文科大学在学中に、上田敏や夏目漱石らの文学講義を受けており、教育的な指導も仰ぎながら夏目らと親交を深めている。帝大卒業間近に小松は、チャールズ・ラム(1775～1834年)著の"The Tales from Shakespeare"(1807年)を翻訳し『沙翁物語集』(1904年)として刊行する。その『沙翁物語集』序文には、恩師の上田敏や夏目漱石らの文章が挿入掲載されている[16]。小松武治の持論とした教育論については、当時の受験雑誌である『受験と学生』11(1)(研究社、1928年、国立国会図書館蔵)によ

く表れている。

「日本文でなければ読めぬやうな工芸家を幾ら輩出さしても高等教育を授くる専門学校としては価値なき訳である。[略]諸君にして世間の喧ましくいふ声に釣り込まれて、幾分にても英語を軽視するやうな考を起す人があつたならば、その人は呪はれたる運命の人であるだろう。[略]英語を通して、諸外国の書物や雑誌等を読み、又は訳したりすることに由り、我見聞を広め我智能を肥やし我品性を磨く等凡て先方から接取吸収することに努力し来つている[17]。」

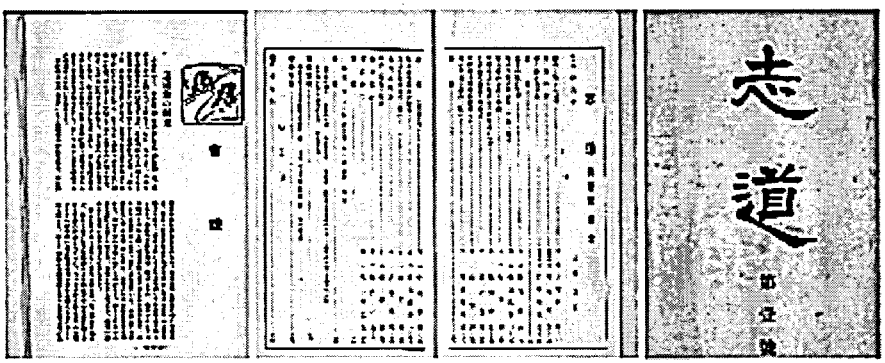
小松の教育論は、たんに英語に傾注するのではなく、英語をとおして諸外国の文献や雑誌などを読んだりし、それによってより見聞を広め知性や品性を磨いていこうとするものである。英文学や漢学などにも通じていた中村正直や夏目漱石ら先人教育者のように、青年子弟の円滑な人間形成をはかることを主眼として教育に従事していたと考える。小松自身、青年期に W.A. マーチン(中村正直訓点)『天道溯源』を読み、人間形成において多大な影響を受けたとしている。1880 年 9 月～ 1891 年 7 月に、東京大学文学部 3 年生を対象にした「漢文学」を受持った講師中村正直は、次のような「教授申報」を明らかにしている。

「毎月大約二三次ハ作文ヲ試ミタリ[略]以テ之ヲ奨励セリ文題ハ我ヨリ出スコトアレトモ大抵ハ学生ヲシテ平日ソノ読メル英書ヨリ一二章ヲ描キ出シ漢文ヲ以テ翻訳ナサシメタリコレハ余少シク英書ニ通スルノミナラス該学生固ヨリ英学ヲ可ナリニ能クスルコトナレハカクノ如キ課業ハ後来ニ至リ英漢対比スル訳文ヲ作ルノ時ニ裨益アルベシト思ヘルナリ又目今ノ利便ニモ漢文ヲ作リナガラニ英文モ細読シ訳語ヲ考求シ得ヘク功力分レズシテ一挙両得ノ益アルベシト思ヒタルカ故ナリ学生モコノ挙ヲ喜ヒ勉強シテ従事セシカハ一学年ノ終ニハ大ニ進歩ヲ見ハシ余カ意ヲ満足ナサシメタリ[18]」

小松も、同上のような創意工夫した教授指導を本学院でも試みていたのではないか。小松が部長を務めた雑誌部幹事(1929 年度)の江見章

夫(高等科３年)は、『志道』第１号(1930年)の「編輯後記」に次のような編集上の苦心談を吐露している。

「元来雑誌編輯といふことは容易なものではない。材料をただ羅列しただけでは雑誌としての価値はないのであつて、その材料を如何に調和的に芸術的に盛るかと言う点に多大の苦心が存するのである。されば本誌の如く論文も文苑も名簿も一冊の中に盛らねばならぬ雑誌は、その編輯に一段と苦心を要する訳である[19]。」



２－(４)

1928年11月～1933年１月まで、大東文化学院教授(漢文)兼教務主任を務めた内堀維文(1872～1933年)もまた、大津淳一郎総長のもとで本学院の教育運営を進めた主要人物である。『大東文化大学五十年史』では、内堀の果たした業績について「昭和四年には、日華学会々長代理であった内堀維文先生が教授として就任し、在任期間こそ短かったが(昭和八年一月逝去)高度の視点から中国事情紹介に尽くした功績は見逃すことが出来ない[20]。」と、簡略に記している。内堀は、東京高等師範学校文科を卒業し、東京高等師範学校訓導、神奈川県師範学校長、静岡県師範学校長、長野県師範学校長、旅順工科大学予科・専門部教授等を歴任した教育界のエキスパートで、著書に『中等教育漢文教授法』(1903年)、

『実用教育学』(1909年)などがある。大東文化学院時代の内堀については、『内堀維文遺稿並伝』(1935年、谷本宗生蔵)の学院校友諸氏の思い出に詳しい。たとえば、本学院卒業生の田中稲積は、「大東文化学院時代の内堀先生」と次のように述べている。

「昭和四年の夏、我々が外務省の援助を得て第一回の支那大陸旅行の壮図を断行し得たのも先生の御尽力が与つて大なるものがあつた。その時など、あだかも我が子が旅行に出発するが如く、同行者を家庭に集め何くれとなく細かい点まで御自分の経験談と共に御注意下され、且つ在満・支の知人に、それぞれ斡旋の労を執らるるやう御手筈を定めて下さつた。三ケ月にまたがる大旅行が終始一貫、至る所で歓迎され愉快なる裡に初期の目的を達し得られたのも先生の御配慮に負ふ所が多大である[21]。」

内堀は、自らも大東文化学院第3回鮮満支旅行団長を1931年7月に務めて、「在支・在満邦人の間にも、よき印象と『大東文化学院』の好評とを博」[22]したと称される[23]。

また本学院教授の法本義弘は、「往時茫として夢の如し」と内堀先生の人となりを印象深く記している。

「教授への期待に心躍らせていた。『内堀さんて、どんな人だい』誰も知つている者はなかつた。が、消息通の誰かが、やがて何処からか聞いて来て、皆に吹聴して言つた。『高師の古い先輩で、こないだまで旅順の工科大学の先生だつたんだよ。』すると、又誰かがお国言葉で、『工大の先生が、何故、俺等の先生になつたんぢやろ』といふ。すると、又外の一人が、羊羹色の紋付の腕を肩まで捲りながら、『そりや、お前。騒動で学校の中がガラガラに壊れてんぢやから、工大の先生に頼んでコンクリートで固めんならんぢやないか』と受けたので、みんなが大笑ひになつて、笑つている中に肝心の詮議のことなど忘れて了つていた。が然し、[生徒ら]誰も彼も、内堀先生は工科系の人だと思つていたのである。その内堀先生の授業は、最初から私共に注意と尊敬とを払は

せた。『こんどの教務主任の内堀さんの授業はええぞ』誰も、彼もがさういつて、他の学年の者までが聴きに来たりした。どつしりした、落付きのある声は、高くはなかつたけれども、よく講堂の隅々にまで徹底したし、箇条書に板書せられたる教授法など、この学院では珍らしく、而かも学生にはよく分つた。ただ困るのは、先生の字が時々よめなくて、問ひ直し直し筆記したのであつた。中学を出たばかりの私共に、正直な所、先生の字は難かしすぎた。『講義はええが、あの先生は字が下手や』上方から来ている学生はさういつた。みんなが合点々々した所を見ると、やつぱりさう考へていたらしい。所が、級の中の誰かが、書道展を見に行つて来て、『オーイ、内堀さんの書は無審査ぢやぞ』と放送したときには、みんなが意外だといふ顔を見合せて、『本当かい？』と、何だか担がれている様な気がした。私どもは、書が判らなかつた。[略]もう此の頃には、誰も彼も、先生にならどんな事を相談しても、持ちかけてもいいといふ絶対の信頼を置く様になつて居つたし、先生が、大東文化学院に対して如何なる抱負を持つて居られるかをもほぼ推察して居つた。[略]学生は誰も彼も、先生を慕つた。土曜・日曜には、先生の大久保邸はさうした学生の群で一杯になつた。其の中に、先生が大東文化学院を世界の大東文化に、少くとも印度以東の大東文化たらしめようとの抱負を持つていられることが、みんなに判つて来た。[略]『青年には不平がある、その不平は誰かが一応は聞いてやらねばならぬ。然るに今の学校教育は、殊に専門以上の学校では、それを聞いてやる先生が居ないのだ』先生は、よくそんな風に仰言つた。密かに推察するに、先生は学生に対する限り、よき話し手たらむよりは、寧ろよき聞き手であろうとして居られたものの如くである[24]。」

法本の証言によれば、内堀維文は本学院生らの訪問に自宅を開放するなどした学生生徒思いの教育者であったといえる。内堀自身は、「よき話し手」よりも多感な彼らの主張に対する「よき聞き手」であろうとつとめている。

2－(5)

大東文化学院同学会『同学』第4号(1928年)の「学院彙報」欄に、1927年2月付の校医嘱託について指摘がある。それによれば、西尾昌伯(小石川区)から鈴木篤三郎(神田区)に大東文化学院の校医職が交代されている。当時の学校医という存在は、学生生徒らに身体清潔、身体運動などを習慣的な心得として周知徹底させながら、疾病予防・健康の維持、基礎体力の向上まで含めた要職として、生徒らを取り巻く教育環境・生活環境の安定を健康管理の一環として重要視していたのではないかと考える[25]。いまだ調査の過程ながら、本学院の校医を務める鈴木篤三郎について関係資料から人物像を追ってみたい。1899年4月、美土代町の青年会館(労働組合会)にて工場衛生や伝染性病毒の予防についての衛生講演「肺病について」を、同年7月にも同会館にて講演「労働と赤痢」を、医師(神保院長)の鈴木は行っている[26]。このような鈴木の社会的な活動に対して、「医者の同情」という労働者の感謝文(労働新聞社)が記されている。

「率先労働運動に関係せる労働者に対し薬価半減入院料三分の一減の恩典を与へられしは、常に余の眼中病人ありて華族も乞食も金持もなしと談りつつある神保院長鈴木篤三郎氏なり[略]斯く神保院の労働者に同情し始むるや、駿河台の兒玉病院、京橋区の和田医院及棚谷医院等も亦少なからぬ同情を労働者に注がれたりき。医は仁術なりと云ふものの、今日金あるを知りて病あるを知らざる医者の多き世の中に以上の如き医者諸君を見るは万緑叢中紅一点と云ふべき乎、茲に謹んで労働者全体に代りて諸君の同情を感謝す、諸君請ふ健在せよ[27]。」

鈴木篤三郎が老若男女の万人に提唱する健康体操法に、『サンダー式体育法詳解』(1905年、国立国会図書館蔵)がある。まず「最初に医師に就き、身体の検診を受け、十分其の意見を聞きて、医戒を厳守せねばなら」ない前提とし、「運動は朝起きて直ぐ行ふが最も好い、朝起きて直ぐ行へば、胃中何物の存ずるなき時で、且前日の疲れを全く忘れて

ある時なるを以て、疲労を感ずるをなく、最も精神に愉快を覚ゆるのみならず、朝は時間の都合も頗る好い時である。」と述べ、運動の進めかたについても「各運動の回数は多きに過ぎ、又は少きに失してはならぬ、必らず示す処の回数を守るべきもの」とし、加えて「運動は成るべく緩つくり行ふが好い、但し急いで行ふべきものは運動法に特に説明をしてあれば注意するが好い。」としている[28]。 鈴木自身も、80歳過ぎてなお現役の医師として活躍している[29]。本学院生らも鈴木校医の健康法などをいかに実践していたのか、今後さらに資料調査を重ねて明らかにしてみたい。

3　昭和戦前期における受験雑誌(～1940年)にみる大東文化学院

以下で取り上げる雑誌『受験旬報』は、1932年11月に欧文社(後の旺文社)から創刊された受験雑誌である。主に当時の中学校生徒らに対して、大学や大学予科、高等専門学校の受験情報を提供し、その受験対策の一助となることを目的としたものである。管見の限りながら、本学の記述を少しひろってみよう。

薩摩隼人「大東文化学院を語る」『受験旬報』8(21)(1938年9月、国立国会図書館蔵)。

「我が大東文化学院とは如何なる学校であるか？[略]知る者ぞ知るである。[略]国家的意義を有する学院が、世人に知られていないか。[略]只漢学と云ふ、現代人にはどちらかと申すと、縁の無い様な学問をやり、且又創立日未だ浅き為であらう。―設立主旨及創立当時の状況―　漢学を興隆せしむる事が、先決問題なり[略]之が設立に当り、如何なる形態を以てするかが問題となつた。その一案には東京帝大に附属して置くべし、又一案は独立して単科大学にして、政府の管理の下に置くべし、と言ふ事であつたが[略]束縛を受けると云ふ訳で、官立ではどうしてもいかぬ、官立以上の特色を出す為私立の形式を取らねばならぬと云ふ事になり国家はそれを認めれば良いと言ふ事に見解の一致を

見た。そこで大東文化協会なるものが出来[ママ]。それが母体となつて、其の研究所に補助を出すと云ふ名目で、大正十二年九月二十日学院設立の認可が下り、愈々天下の興望を担つて、開校と云ふ事になつた[略]以上先輩岡村教授談の要旨 ―内容組織― 学院は本科三年、高等科三年、別に補習科と研究科の二科が有ります。学生は全部で、三百名位です。それが、全員が一家庭の様な具合で、とてもゆとりが有ります。[略]本年[1938年]から本科が三部に分れ一部は修身漢文、二部は国漢、三部が協会の新しき発展を意味する科で、特に力を入れている東亜政経科です。―就職― 就職はこの系の学校とは思はれぬ程良く、九十%にも達しています(高等科はもつと良い。[略])方面は、教育方面が多く、専門、高等、大学の教授三十余名位、特に軍関係の学校は、本院卒業生が占め海兵の如き漢文科の教官は、全部本院卒業生を以て占めている。本年度は満支に行く者多く[略]大陸発展は益々増大して参りつつあります。此の外官公吏銀行会社、新聞社等、満支進出校で人格の出来ている点と、漢文の出来る点では、外に東亜同文書院、内に大東文化と云はれる位です。―最低なる学費― 本学院は先に申しました様に、国庫からの補助の為、授業料は年六十円全国官公私立中最低に属します。数年前までは授業料未徴収でしたが、時代の変化に依り、国庫補助額が少々減ぜられたので、納入させる事になつたのです。聴くところによれば以前は三十円位づつ、学費として学院から戴けたさうです。この外、教練費五円、校友会費六円、後は本代で外に一銭も要りません。三ヶ年の同系の専門学校中、最低額で卒業出来る訳です。―結― 本院の如きは昭和に於ける松下村塾と云ひ得るでせう。それから試験科目ですが、国文、漢文、作文の三科目。漢文は全々白文、難解なる事天下一品(本年は易かつた)。作文に注目、文語体で一寸面食ふ。来年あたり政経科に英数が加はるらしい。これは当然の事であります。大抵四月五日頃で入学は[四月]二十日頃[30]。」

石桐山人「大東文化学院を語る」『受験旬報』9(48)(1940年3月、国立国会図書館蔵)。

「位置と環境　学生歌にもある如く護国の英霊永へに鎮まります靖国神社の横にある木造二階建のとても小さな建築物が我が学院である。周囲は青桐とカラタチの木で取りまかれ、一寸した運動場もない。我々には靖国神社の外苑が遊び場ともなり散歩場ともなるのである。諸君が靖国神社へ参拝される時は、詩吟を朗々？とどなりながら其処、此処をのさばつている大東生を見出すであらう。或は又紋付姿でベンチに昼寝をしている大東生を見るであらう。花の東京の中央九段と言へば如何にも騒々しいだらうと思ふ人があるかも知れぬが、市電の響も聞えない程清閑な所である。窓をあけると白百合高女の美しいコンクリートの建物が呼べば答へんばかりの距離にある。[略]併し十数年間我等大東生が親しみ住み慣れた此の校舎も、現在の状態では余りにも狭すぎるので近く中野附近に新校舎が建設される計画が進められている。特殊な校風　入学して最初に誰もが感ずるのは礼儀正しい事と実に家族的であることである。礼儀正しい事は伝統的であり、学則に定めてあるわけでも無し上級生が強ひるのでもない。電車の内で道路上で何時如何なる場所に於ても、同じ大東の徽章をつけたものは互に帽子を脱いで敬礼をする。入学当時何も分らぬ私は紋付の髯の上級生に敬礼をされて非常に赤面し深く恥入つた事があつた。それから私は上級生より先に礼をするやうになつた。こんなにも礼儀正しい専門学校が、大学が都下に否全国に一体どの位あるであらう。私はかうした学校に入学出来た事を幸福に思ひ感謝せずには居られない。又学院は他の学校に比較して学生の数が少い為であらう。上級生と下級生の間が極めて親密で家族的である。紋付のすごい国士風の上級生も新入生に対しては非常に親切で実に気持の良い程である。その他まだ一人の赤い学生を出した事もない。事変下の新宿、銀座などに於ける不良狩にも、一人の不良学生をも大東に見出さなかつた事によつても充分伺はれよ

う。学資と就職　授業料一ヶ年七十円(年三回分納)校友会費一ヶ年六円(年二回分納)教練実習費五円、その他教科書代として約三十円位、伊勢神宮参拝費として約十円、教練服五円と武道道具費が少々位のものである。寮がないので学生は殆ど下宿する。下宿料は朝夕二食付きで一ヶ月二十五円位が普通だ。次に就職の事だが之れは決して心配には及ばない。本年の卒業生も不足で困つた位だ。主なる就職方面は内地及び満州支那に於ける教育界を初めとして官衙、会社、銀行、商店等である。特に新民会や軍部関係、新興会社に就職する者が多い。日満支三ヶ国が新東亜建設に躍進しつつある今日、我が国はその指導的地位に立つて東亜の治安、産業の開発、文化の増進に当らんとする国士的人材を必要とする事は勿論である。大陸に於ける黎明東亜の建設舞台、或は内地に於ける東洋文化の復興事業、之等は凡て学院卒業生の活躍を待つているのである。入試に就て　募集人員は修漢科、国漢科各約五十名応募者は三倍位である。東亜政経科は約八十名で応募者は五倍位である。右は何れも昭和十四年度の事であるが年々増加しつつある。試験科目は国語、漢文、作文、それに口試が加はる。国語は文法、書取を充分やつて頂き度い。徒然草、平家物語、神皇正統記などは一通り読まれた方が良い。漢文では白文が主である。孟子、十八史略、日本外史、論語は必読を望む。特に孟子は出題される事が度々である。訓点は充分の注意を払つてつけて頂きたい。といふのは出題教授が訓点に非常な重きを置いて居るからだ。次に作文は文語体なる故誤字なきやうに思想のまとまつた文を書くやうに心掛けるのが大切である。題は日本精神や時局、東亜に関したものが出される。口試では時局問題、家庭の状況などで学科については問はれる事は殆んど無い。思想問題にはふれぬやうに注意されよ[31]。」

同上の1938年9月号と1940年3月号の『受験旬報』誌面には、当時の大東文化学院(九段時代)についての特徴がよく表れている。本学院の九段校舎(麹町区富士見町)は狭い敷地の老朽化した木造2階建てで

あったが、それがかえって当時の学院関係者には清閑な地で梧桐(青桐)に囲まれたとても愛着ある校舎であったと認識されている。靖国神社のある九段の地で、詩吟を朗々とどなる学院生らの姿もまた印象的である。学院生らのもつ礼儀正しさや家族的な親密さを含めて、本学院を“九段の松下村塾”などと称していたのも想像できる。1938年度になって、学院本科を3部制(第一部・修身漢文科、第二部・国語漢文科、第三部・東亜政経科)に改組した結果、翌39年度には入学定員第一部50名、第二部50名、第三部80名に対し、志願者数は3倍こえ(東亜政経科は5倍の人気をはくす)となった。このような急激な学生増の事態を受けて、狭隘な九段校舎から学生収容能力ある新たな校舎移転へと必然的に本学院も志向し始めたのである。先輩関係者からであろうか、受験に際しては時局の「思想問題にはふれぬやうに注意」するよう助言が記されている。これは、学院生らの主な卒業後の進路が「内地及び満州支那に於ける教育界を初めとして官衙、会社、銀行、商店等であ」って、なかでも「軍部関係、新興会社」への就職が有力とされた本学院の社会的な特徴ともかかわっている。本学院を受験し、入学してくる多くの青年子弟らも、当時の本学院の位置付けやその社会的な特徴については理解していたものと考える。本学に在学して後、学院生らはさらに自己の進路を模索・選択していったのである。

おわりに

本稿は、本学の大学史で従来ほとんど触れられなかった関係資料を用いて、戦前の大東文化学院(九段時代)について検討を試みたものである。実は、本稿では残念ながら言及できなかった関係資料もある。たとえば、北陸の金沢にある古書店より入手することができた、ある学院卒業生の日記(追悼本)もその1つである。それは、石川富男『慎疾録』(1941年、全337頁)である。石川は1932年に学院本科を、1935年に学院高等科を卒業した人物である。すでに在学中から体調を崩し

ていながらも、なんとか本学院を卒業した石川であったが、卒業後も数年にわたり病気療養を続けている。その後一時、愛知県の高等女学校教員として就職するが、1940年には亡くなっている。このような学院校友の日記類(在学記)や教職員の追悼集などを、これからも積極的に資料発掘していきたいと考えている。

---

[1] 谷本宗生「私の大学史編纂・大学史研究の遍歴と大東文化歴史資料館での私の役割」南山アーカイブズ『アルケイア　記録・情報・歴史』第9号(2015年)、95～108頁。

[2] 『独学受験就職全書』(1925年)、239～241頁。

[3] 『全国官公費貸給費学校入学受験案内(附)最近各学校入学試験問題集』(1931年)、117～123頁。

[4] 『大東文化大学の歩んできた道』(2013年)、19頁。

[5] 『大東文化大学五十年史』(1973年)、303～304頁。

[6] 『東文』第1号(1941年)、10～17頁。

[7] 大東文化学院同学会『同学』第4号(1928年)、大東文化大学図書館蔵。

[8] 『哲学新綱』(1926年)、9頁。

[9] 『同学』第4号(1928年)、93～94頁。

[10] 「学生状況一覧」「卒業生就職就学状況一覧」『大東文化学院要覧』(1933年)、国立国会図書館蔵。

[11] 浅沼薫奈「大東アーカイブス第20回企画展」『大東文化歴史資料館だより』第20号(2016年5月)。

[12] 『同学』第4号(1928年)、116～117頁。

[13] 『中山博道剣道口述集』(1990年)、91頁、谷本宗生蔵。

[14] 同上書、94～95頁。

[15] 大東文化学院志道会『志道』第1号(1930年)、谷本宗生蔵。

[16] 久保忠夫「小松武治先生と『沙翁物語集』」『東北学院資料室』第2号(2002

年)、12～17頁。

[17] 『受験と学生』11(1)(1928年)、104頁。

[18] 『東京大学第一年報』(1882年)、262頁、東京大学附属図書館蔵。

[19] 『志道』第1号(1930年)、154頁。

[20] 『大東文化大学五十年史』(1973年)、304頁。

[21] 『内堀維文遺稿並伝』(1935年)、1037頁。

[22] 同上書、1072頁。

[23] 吉田篤志「大東文化学院時代の中国旅行記(一)」『大東文化歴史資料館だより』第14号(2013年5月)、吉田篤志「大東文化学院時代の中国旅行記(二)」『大東文化歴史資料館だより』第15号(2013年11月)、浅沼薫奈「所蔵資料紹介『昭和六年七月　支那旅行案内』(大東文化学院)」『大東文化歴史資料館だより』第21号(2016年11月)。

[24] 『内堀維文遺稿並伝』(1935年)、1068～1074頁。

[25] 谷本宗生「東京大学予備門・第一高等中学校の学校医(摂生室医員)の存在について」『一八八〇年代教育史研究年報』第5号(2013年)、109～120頁。

[26] 『東京朝日新聞』第4603号(1899年4月29日)、2面。

[27] 片山潜・西川光二郎『日本の労働運動』(1901年)、附録16～17頁。

[28] 『サンダー式体育法詳解』(1905年)、49～52頁。

[29] 「雪の戦士に医療奉仕　八十翁・寒さを衝いて巡回　鈴木院長」『東京朝日新聞』第20427号(1943年2月4日)、3面。

[30] 『受験旬報』8(21)(1938年9月)、96～98頁。

[31] 『受験旬報』9(48)(1940年3月)、73～75頁。

The History of Daito Bunka Gakuin viewed from Gakuin Related Materials
— A Story of Daito Bunka Gakuin (The Era of Kudan Campus) —

Muneo Tanimoto

This report considered the history of Daito Bunka Gakuin before the Asia-Pacific War (~1940) as a story of Daito Bunka Gakuin (the era of Kudan campus) from Gakuin related materials. In addition to the "examination magazines" and "advancement school guide books" at the time, "memoirs" of Daito Bunka Gakuin alumni and faculty staffs (Gyokuho Nishiwaki, Hiromichi Nakayama, Takeji Komatsu, Korebumi Uchibori, Tokusaburo Suzuki) listed in "alumni journals" and "alumni association magazines" are also very important as materials. Transition from benefit system to scholarship system for students from 1931, establishment of three-departments system of regular curriculum course from 1938, etc. can be said as the historical epoch of Daito Bunka Gakuin. The era is just before the campus is relocated from Kudan to Ikebukuro.